

マルコによる福音書 12 章 38 節～44 節

2018 年 3 月 19 日

古本 靖久

1、聖歌 503 番 「心を高く上げよ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 88 ページ）

4、テキストの位置

イエス様はエルサレムに入ってから、多くの人たちと論争を繰り返してきました。

先月の箇所では、適切な答えをした律法学者の話に続き、メシアに関するダビデの預言が理解できない律法学者に対する批判がありました。

イエス様が語る先には、ファリサイ派や律法学者といった敵対勢力がいました。しかし彼らとの会話は終わっていきます。

今回の場面の前半で、イエス様は群衆に対して語られています。しかし後半以降は、弟子たちに対する教えに変わり、これ以降公衆の前でイエス様が教えられることはありません。

マルコによる福音書では、律法学者に代表される権威思考を強く批判するイエス様が強調されています。今日の場面では、具体的にどのようなことを非難されているのでしょうか。

エルサレムにて	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	神からの権威
		12:1-12	取り上げられる実り
		12:13-17	神のものは神へ
		12:18-27	生きている者の神
		12:28-34	たいせつなのは愛
		12:35-37	キリストとは
		12:38-40	律法学者批判
		12:41-44	たくさん入れた人
		13:1-13	神殿の崩壊予告
	13:14-37	終わりの日のこと	
	水曜日	14:1-2	イエス殺害計画
		14:3-9	埋葬準備
		14:10-11	ユダの思い

5、節ごとに

◆律法学者批判

12:38 (そして) イエス (彼) は (その) 教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまといて (着て) 歩き回ることや、広場で挨拶されること、

この物語の前、イエス様は神殿の境内で大勢の群衆に語っていました。今回の場面もその続きです。神殿には祭司や律法学者たちもいたことでしょう。しかし、イエス様は構わず彼らの批判を始めます。

前回は彼らの教えに対する批判でしたが、今回は行動に対してです。まず、長い衣を着て歩き回ることを批判します。長い衣とは律法学者の正装で、本来宗教行事に当たるときだけ身に付けるものです。しかし彼らは日常的に長い衣を身に付けていました。そのことで自分の地位を人々にひけらかしていたのです。そのことを、イエス様は咎めます。

このような箇所を読むと、わたしたちは身近な場面に当てはめて考えてしまいがちです。しかし、例えばフランシスコ会の修道士が着る修道服は、清貧をあらわすしるしとして、また牧師が首につけるカラーは、神さまに対する首輪として、理解して身に付けていれば、何ら問題はありません。その衣服によって、自分は偉いのだとアピールすることがよくないのです。

また広場で挨拶されるのを喜ぶのは、周りの人に対し、自分が高い地位にあることを示すことができるからです。

旧約聖書のエステル記 3 章 1～2 節にこのような物語があります。

その後、クセルクセス王はアガグ人ハメダタの子ハマンを引き立て、同僚の大臣のどれよりも高い地位につけた。王宮の門にいる役人は皆、ハマンが来るとひざまずいて敬礼した。王がそのように命じていたからである。しかし、モルデカイはひざまずかず、敬礼しなかった。

このハマンという人は、モルデカイの行動に腹を立て、ユダヤ人を滅ぼそうとします。挨拶とは少し異なるかもしれませんが、挨拶をされないということは面目をつぶされる事になります。



12:39 (そして) 会堂では (の) 上席 (や)、宴会 (食事の場) では上座に座ることを望み、
(んでいる。)

続けてイエス様は、会堂の上席や食事の場での上座について語ります。このイエス様の言葉に限らず、今の時代でもなかなか礼拝堂の前が埋まらなかったり、食事のときも席が決まらなかったりということがしばしばみられます。しかしイエス様が言われているのは、そういうことではありません。

律法学者は、上席や上座に座ることに、強いこだわりを持っていました。そこに座ることで、人々の尊敬を集めようとしていたのです。イエス様は、そのような彼らの態度を強く批判します。

12:40 また、(彼らは) やもめの家 (々) を食べ物にし (つぶし)、見せかけ (だけ) の長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい (より大きい) 裁きを受けることになる (だろう)。」

さらにイエス様は続けます。彼ら律法学者は、やもめを食いつぶしていると。やもめとは、夫に先立たれた女性のことで。この時代、やもめが生きていくためには、周りからの援助が不可欠でした。その彼女たちに対し、律法学者は「祈ってやるから、謝礼を出すように」と迫っていたのでしょう。さらにありがたみが増すように、長く祈るのです。

彼らのおこないについて、見た目は敬虔なように見えるが、実際はどうなのだとイエス様は言われます。律法学者は神さまのみ心を日々研究している人たちでした。しかし彼らは、このようなことを悪気なくおこなっていました。だから大きな裁きに値するのです。

<前半の箇所から>

律法学者が大切にしたこと。それは「人から見て」どのように見えるかということだったのではないのでしょうか。長い衣、挨拶、上席、上座、そしてやもめのために長い祈りをするということ。それらは神さまから見たら、意味のないものだったのでしょうか。

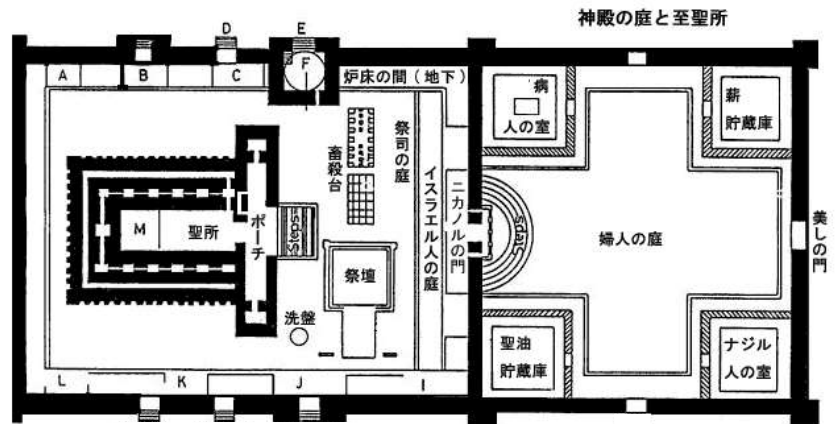
このイエス様の言葉は、今を生きるわたしたちにも語られています。様々な場面で、わたしたちは人から良く見られたいと望みます。大勢の人前で褒められたいと願います。それが神さまの栄光をあらわすためのものであれば、何ら問題はないと思います。しかし人の目を意識したときに、わたしたちの思いは神さまの思いとは違う方向に行ってしまうのではないのでしょうか。

◆たくさん入れた人

12:41 (そして) イエス (彼) は賽銭箱の向かい (側) に座って、群衆がそれ (賽銭箱) に金 (銅貨) を (投げ) 入れる様子 (の) を見ておられた。(そして) 大勢の金持ちがたくさん (投げ) 入っていた。

場面は変わります。イエス様は婦人の庭にいたと思われます。賽銭箱という言葉は、直訳すると宝物入れです。

神殿の庭にはラッパ状の賽銭箱が13個置かれており、そのうちの1つをイエス様は見ておられました。



賽銭箱がラッパの形をしているのは、銅貨の音が鳴り響くからです。たくさん入れると、その音は大きく響き渡ります。それを聞いた人々は、「あの人はたくさん入れた」と気づくわけです。

おそらく彼ら金持ちは律法の決まり通りに収入の十分の一をささげ、さらにあらゆる伝承に従って計算された献金をささげていたのでしょう。そしてそのことに満足していたのです。

12:42 ところが (そして)、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、(を投げ入れた。) すなわち一クアドランスを入れた (にあたる)。

イエス様の視線の先に、もう一人の人物があらわれます。彼女はやもめでした。先ほども説明したように、彼女は夫に先立たれ、貧しい生活を強いられていたようです。

彼女がささげたのは、レプトン銅貨二枚です。口語訳聖書では「レプタ2枚」と訳されていました。実際にはそのような名前の貨幣があったわけではなく、その当時流通していた、最小単位の小銭を意味していたようです。

その2枚の小銭は、1クアドランスほどの価値しかありませんでした。64クアドランスは1デナリオンに当たります。1デナリオンは一日の日当の額に当たるので、1クアドランスは130円くらいでしょうか。

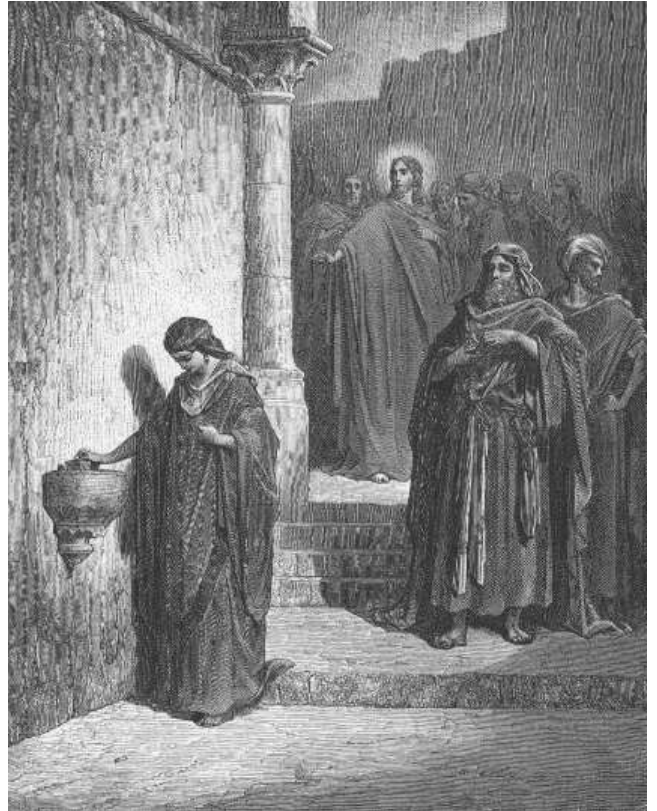
彼女はその小銭を二枚、投げ入れました。神殿にとっては、わずかな額です。金持ちのように、賽銭箱は鳴り響きません。

12:43 (そして) イエス (彼) は、弟子たちを呼び寄せて (彼らに) 言われた。「はつきり言っておく (アーメン、わたしはあなたたちに言う)。この貧しいやもめは、賽銭箱に (投げ) 入れている人の中で、だれよりもたくさん (投げ) 入れた。

イエス様はここで、弟子たちを呼び寄せます。福音書にはこの「呼び寄せる」という語がたびたび出てきます。近くに来させて、特別な言葉を告げるのです。

「アーメン、わたしはあなたたちに言う」。イエス様のこの言い方が出て来たときには、重要な教えが続きます。これ以降の言葉は、弟子たちや教会にとって、とても大きな意味を持つのです。

イエス様はやもめの献金を大いに褒めました。額だけをみたら、決してたくさんというわけではありません。しかしイエス様は、彼女の行動を良しとされたのです。



12:44 (なぜなら) 皆 (すべての人) は有り余る中から (投げ) 入れたが、この人 (彼女) は、(自分の) 乏しい (さの) 中から自分の持っている物をすべて、生活費 (のすべて) を全部 (投げ) 入れたからである。

彼女が投げ入れたのは、彼女が持っているすべてでした。考えてみると無謀なことでした。彼女は二枚の銅貨を投げ入れましたが、一枚だけにして一枚を手元に残すこともできたはずでした。しかし彼女はそうはしませんでした。

献金をすることで、今後の生活が良くなる保証が与えられたわけではありません。この貧しいやもめがこの先どうなったのか、そのようなことも何も書かれてはいません。

しかしこのやもめに、「神さまにすべてを委ねる」という姿を見ることができます。それとは対照的に、金持ちの打算的な態度や、人前でいい格好をしようとする姿勢も感じることができます。

貧しいやもめは今、神さまの前にできることを、精一杯おこないました。わたしたちも献金だけではなく、行いもすべて、神さまにおさげすることができればと思います。

<後半の箇所から>

ささげ物とは何でしょう。貧しいやもめは、持っているすべてをささげました。それはこの世的な価値基準からすると、本当にわずかなものでした。金持ちはたくさんの額をささげました。しかしあり余るほど持っていたものに比べると、ささげた物はなくても困ることはなかったでしょう。



聖餐式の奉献の場面で、わたしたちは唱えます。「すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主にささげたのです」。

神さまはわたしたちに、すべてをささげるように求めます。それは決して無一文になれということではなく、これらはみな「自分のもの」ではなく「神さまからいただいた賜物」だという意識を持つことだと思います。

献金をするとき、まずその月の必要経費を計算し、残っているものをささげるとしたら、順序は違っているのかもしれませんが、まず、神さまを信頼しておささげする。おささげするのはお金だけではありません。時間や労力、自分自身をもおささげする。そしてそれらを、神さまのみ心のままに用いていただくのです。

このやもめの献金の物語は、イエス様の十字架の先取りとして語られました。やもめがすべてをささげて神さまに委ねたように、イエス様もまもなくご自分の命を差し出します。十字架を負い、神さまのみ心にすべてをお委ねされるのです。

イエス様がわたしたちのためにささげられたささげ物。その重さを感じながら、イエス様の十字架を思い起こしていきたいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は4月19日(木)10時半からです。「神殿の崩壊予告」(マルコ13:1~13)について学んでいきます。